文段分析の一考察（1）
―― 語彙的手段による反復 ――

塩　澤　和　子

1　段落について

一般に「段落」は、改行一字下げによる形式上の区分によって示されるが、この「形式段落」が我が国に行われるようになったのは、「明治時代になって欧米のパラグラフの形式が印刷面に導入されて」からで、「早いものでは、明治二十年代にパラグラフごとの改行、その冒頭一字あけの形式が行われるようになった」(注1)という。しかし当時は「段落」とは言わず、五十嵐力（1909）によると、「個文の累積して更に複雑なる思想の一団を結束したるものを節といふ。節は或は段とも呼んで、昔は其の結尾に段落といふ』印を附ける例であったが、今は大抵節毎に行を改める習慣に成つて居る」(注2)とあって、「節」或いは「段」と呼んでいたことが分かる。当時「段落」は「節或は段」の結尾を示す印（ 』）を意味していたのである。

五十嵐力の言う「節或は段」は、「個文の累積して更に複雑なる思想の一団を結束したるもの」と定義され、「大抵節毎に行を改める習慣になっている」とされるが、現行の「形式段落」が必ずしも「思想の一団」を表しているとは限らないため、これはむしろ「文段」に近い概念といえる。

時枝誠記（1960）によれば、文章における段落の区切りは「決して絶対的なものではなく、相対的なものであることが分る」とし、実例分析で「文脈の連続と屈折とをめやすに」文段の分析を行っている。そして「文において、その成分相互の間に入れ子型構造形式が存在する」という考えを文章の展開にも適用し、文章の論理的展開の相からの観察により「分析された文段は、文段相互に各個別に関係を構成するのではなく、常にある纏まりをなしつつ、相互に関係を作るのである」(注3)と説いている。

文章の成分としての段落を考える場合、この時枝誠記が提示する段落の区切りを相対的なものと見なす見解は、文法論的文章論の構築を目指す言語研究の

立場に多大の影響を与えたことは否定できない。佐久間まゆみ(注4)は、文法論的文章論の成立に関し、3つの立場を挙げている。(　)内の人名は、佐久間が挙げる各立場を代表する研究者。

A　全面的に否定する立場（金岡孝）

B　部分的に条件付きで肯定する立場（市川孝）

C　全面的に肯定する立場（永野賢）

ここで否定論の立場をとる金岡孝の、「段落」に関する見解を『文章についての国語学的研究』で確認しておきたい。金岡は「それら（文または文章）の成分が文法論的分析の対象になり得るためには、成分そのものが言語形態として客観的に固定したものであることが必要である」との立場から、段落の区切りは「根本的には読み手の文章内容に対する主体的把握に基づくことであ」るから読み手による揺れが避けられない、また「改行が必ずしも内容上の区分と一致しない場合もあるし、また常に文章全体の構成を考えて適切に行われているとは限らない」点を指摘する。そして「文段の性格が右のようなものとして認められるならば、また、言語単位が文法学的に取り上げられるためには、その意味上の類型が外形上の指標に対応していなければならないとするならば、文章の構造を論ずるのに文段をもってすることは、すでに文法学の範囲をこえたものといわなければならないのである。」(注5)と結論付けている。

この金岡の見解は、確かに段落の区切りが主観的判断による揺れを含むという点では一理あるが、同時に文章の成分としての「文段」を文法学上の言語単位として認めない行き方は、現在では妥当性を欠く見解となっていると言えるかと思う。従来の文法論の立場に立脚すれば「その意味上の類型が外形上の指標に対応」することの証明が不可能であったとしても、現在では森田良行(1993)が指摘するように、徐々にではあるがそれなりに研究の成果を上げているからである。

そこで、展開を考えるのに展開方式からはいらず、成分の側からアプローチしようという方法も生み出される。この場合、表現形態を仕分ける客観的方法として何をよりどころとするかが問題なのだが、その一つとして文の表現形態の違いを基準とする方法がまず考えられる。つまり文型の違い、主として何ガ・何ハを表す主語や主題を示す部分の形式とそれを受ける述部の陳述形式とが表現形態を見分ける大きな目安となる。これは確かに主観的判断を排除した科学的方法として、展開部における意味把握に有力な

手がかりを与えうると思われる。特に接続助詞や接続詞のような展開語が用いられない場合には、展開の意味を客観的にとらえる有効な手がかりとなるであろう。少なくとも主観的判断による処置よりは前進した科学的、学問的態度といわなければなるまい。もっとも文型や陳述形式といった表現形態のみで、はたして展開の真相がとらえられるかという疑問は依然として残る。(注6)

成分分析からのアプローチという方法で、表現形態の相違に注目し、実例分析による研究成果は「主観的判断を排除した科学的方法」との評価を得ているのである。今後、文法論的文章論研究を進めるには、森田良行が指摘する以下の点の考察が必要となる。

今までの文章論はあまりにも個々の展開機能にとらわれすぎていた。今後の課題は、文章の成分がどのような統合原理によって上位成分となっていくか、成分認定の客観的方法を打ち出すことであり、それに伴う統括機能の究明ならびに中断点の解明である。さらにいえば、そのようにして得られた成分の分類と文章構成の体系化である。(注6)

さて本稿では、森田良行が挙げる課題の一つ「成分認定の客観的方法を打ち出す」ことを目指し、一試論として、語彙的手段による反復表現の観察を手がかりに、文段認定の方法を探っていきたいと考える。語彙的手段に関してはすでに拙稿(注7)で「社説」を取り上げ、考察を加えたことがあるので、今回は「解説文」を取り上げて検討する。

方法として、まず読み手による段落判定調査を実施し、文章内容に対する主体的把握の実態と、段落に対する共通的認識の有無を探る。その結果を踏まえて、反復表現による実例分析を実施し、筆者の設定する段落との関係を検証する。なお、本稿に続いて他の言語形式による分析も実施する予定である。

2　段落判定調査

2－1　調査の概要

（1）調査資料と資料選択理由

本調査は段落を認定する客観的手がかりを求めるため実施する調査であるため、対象とする文章を次の条件をもとに選択した。

1．論理構成が確かで、文章の展開が明瞭であり、内容的まとまりとその相互の関係を容易に把握しやすいと判断される文章を選択する。
2．文体的効果を意図して、段落の区切りと内容的まとまりが一致しないような文章、筆者の嗜好が濃厚に反映した段落設定の文章、1文1段落のような比較的段落を多く設定する傾向の文章は除く。

以上の条件に適う文章として、以下を選択した。

和辻哲郎「解説」(中勘助著『銀の匙』の解説文　岩波文庫　1987年)、『銀の匙』の「解説」は、6段落構成で41文からなる。後付に「昭和10年　和辻哲郎」とある。ちなみに、この年は、和辻哲郎46歳、中勘助50歳である。

(2) 調査方法

「解説」の文章から筆者の設定する段落を外し、41個の文が横並びになるよう作成した文章を被験者に提示した。それを読み、被験者各人の判断で段落分けをするよう指示した。何段落に分けるかの段落構成数は指定していない。

(3) 実施期間・被験者

調査実施期間　1994年11月2日～11月11日実施
被験者　　筑波大学1、2年生、男女計101名

(4) 文章例(和辻哲郎　『銀の匙』の「解説」)

(参考までに筆者の段落分けはⅠ～Ⅵの数値で示しておく)

Ⅰ

1．『銀の匙(ぎんのさじ)』の作者中勘助(なかかんすけ)氏は、世間一般向きの雑誌や新聞にはほとんど執筆しない希有(けう)な作家であるから、あまり広くは知られていないかも知れない。
2．しかし氏の作品のすぐれた価値を知っている人も決して少数ではない。
3．それらの人々の間にはすでに古くからこの作家が非常にすぐれたまたきわめて独創的な芸術家であることが理解せられている。

4．初めて『銀の匙』に接する読者諸氏のためにこの定評を紹介することもむだではなかろうと思う。

Ⅱ

5．中氏は青年のころには詩歌を愛読して散文を顧みない人であった。

6．大学では初め英文学科に席を置いたが、のち国文学科に転じてそれを卒業した。

7．それはちょうど日本で自然主義の文芸が勃興（ぼっこう）し、また他方に夏目漱石（なつめそうせき）が作家として仕事を始めたころであった。

8．しかし中氏はこれらのいずれもからほとんど影響を受けなかった。

9．氏が念願とするところは詩の形式によって氏独特の世界を表現することであったが、そういう創作欲を刺激し煽（あお）るようなものはそれらのいずれにもなかったからである。

10．そこで氏はただ自分自身の世界をのみ守りながら、それをいかにして詩の形に表現しうるかに苦心した。

11．がついに、現代の日本語ではほとんど不可能である長詩を断念して、最初は屈辱をさえも感じながら、散文に筆を執るようになった。

12．その最初のまとまった作品がこの『銀の匙』の前篇なのである。

13．それは明治四十四年の夏、信州野尻湖畔（のじりこはん）において書かれた。

14．作者はその時二十七歳であった。

Ⅲ

15．この作品の価値を最初に認めたのは夏目漱石である。

16．漱石はこの作品が子供の世界の描写として未曾有（みぞう）のものであること、またその描写がきれいで細かいこと、文章に非常な彫琢（ちょうたく）があるにかかわらず不思議なほど真実を傷つけていないこと、文章の響きがよいこと、などを指摘して賞賛した。

17．そうしてこの作品は翌年漱石の推薦によって東京朝日新聞に掲載せられた。

18．当時この作品を漱石ほどに高く評価した人は多くはなかったであろう。

19．しかし今にして思えば漱石の作品鑑識眼はまことに透徹していたのである。

Ⅳ

20．『銀の匙』後篇は翌大正二年の夏叡山（えいざん）で書かれた。

21．漱石はこれを前篇よりもいっそう高く評価した。

22. これもやがて同じ新聞に掲載せられた。

V

23. 漱石がこのように高くこの作品を評価したのは、この作品の独創性をだれよりも強く感じたからであろう。
24. 実際この作品には先人の影響が全然認められない。
25. それはただ正直に子供の世界を描いたものであるが、作者はおのれの眼(め)で見、おのれの心で感じたこと以外に、いかなる人の眼をも借りなかった。
26. 言いかえれば「流行」の思想や物の見方には全然動かされなかった。
27. この希有な性格は、この作者の後の作品にも顕著に現われている。
28. 『犬』『提婆達多(だいばだった)』『沼のほとり』『菩提樹(ぼだいじゅ)の蔭(かげ)』『しづかな流れ』『母の死』『琅玕(ろうかん)』などすべてそうである。
29. 作者はおのれの世界以外にはどこへも眼を向けようとしない。
30. いわんや文壇の動きなどは風馬牛である。
31. だからまたその作品は文壇の動きにつれて古臭くなるなどということもない。
32. 二十五年前の作たる『銀の匙』は今の文壇に出しても依然として新鮮味を失わないであろう。

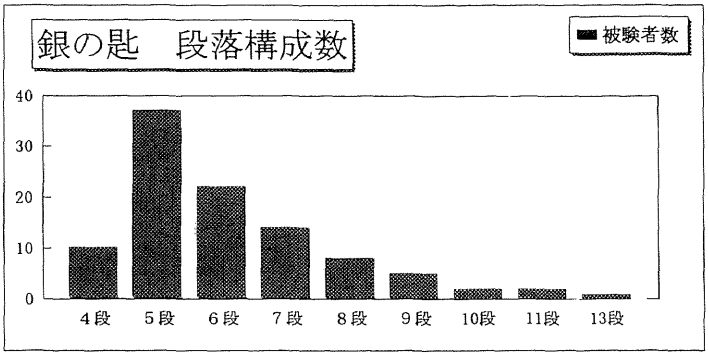
VI

33. 『銀の匙』には不思議なほどあざやかに子供の世界が描かれている。
34. しかもそれは大人(おとな)の見た子供の世界でもなければ、また大人の体験の内に回想せられた子供時代の記憶というごときものでもない。
35. それはまさしく子供の体験した子供の世界である。
36. 子供の体験を子供の体験としてこれほど真実に描きうる人は、(漱石の語を借りて言えば)、実際他に「見たことがない」。
37. 大人は通例子供の時代のことを記憶しているつもりでいるが、実は子供として子供の立場で感じたことを忘れ去っているのである。
38. 大人が子供をしかる時などには、しばしば彼がいかに子供の心に対して無理解であるかを暴露している。
39. そういう大人にとっては、人の背におぶさっているような幼い子供の心の細かい陰影の描写などは、実際驚嘆に価する。
40. ああいうことは、大人の複雑な心理を描くよりもよほど困難なのである。
41. こうなると描かれているのはなるほど子供の世界に過ぎないが、しかしその表現しているのは深い人生の神秘だと言わざるを得ない。

2－1　段落構成数

被験者の分ける段落構成数は、4段落構成から13段落構成まで9種類ある。（図表1参照）

構成数	4段	5段	6段	7段	8段	9段	10段	11段	13段	合計
被験者	10	37	22	14	8	5	2	2	1	101



〔図表1〕

5段落構成（37名）を頂点として、6段落構成（22名）、7段落構成（14名）が続き、以下、4段落構成（10名）と8段落構成（8名）がほぼ同数で並ぶが、その後は段落構成数の増加に反比例して、被験者数は減少する。上位4位までの合計が83名（82%）にも達する点から見ると、段落分けは、4～7段落構成に集中する傾向があるといえる。筆者は6段落構成を取るため、被験者の大半が筆者に近い形で段落分けをしたと解せるが、6段落構成より5段落構成が多い点では筆者とのずれが認められる。

2－2　段落内部の観察

そこで被験者全体の80%強を占める上位4位までを対象に、段落がどのような文集合で分けられているのか、被験者間に共通点は高いか、検討したい。

整理の結果、83名中57種の段落分けの型があることが判明した。

4、7段落は各2名だけが共通の段落分けをするだけで、残りはすべて異なる。5段落構成では、8名共通が1、4名共通が3、2名共通が1、残り15名はすべて異なる。6段落構成では、5名共通が1、2名共通が3、残り11名は

構成数	被験者	種　類
4段落	10名	9
5段落	37名	20
6段落	22名	15
7段落	14名	13
合　計	83名	57

すべて異なるという結果である。

このように段落構成数が同じでも段落の分け方には共通点が少なく、被験者が任意に段落分けをしている実態が確認できる。

そこで57種類を類型化することを試みた。類型化に当たっては次のような観点を取り入れた。まず4段落構成を基本に、4段落構成の各段落の冒頭文と共通する各段落構成の型を一つのグループにまとめた。その結果、4A型、4B型、4C型、4D型、4E型、L型の6種類に類型化することが出来た。これらに含まれないのは「その他」として一括した。

各類型に該当するに文集合を整理すると、以下のようになる。ここでは、4段落構成の文集合を基本とし、そこから特定の段落の文集合が細分化され、5段落構成、6段落構成、7段落構成へと派生していく細分化の様相が把握されやすいように配列してある。例えば4A型は、まず［1－3］［4－11］［12－32］［33－41］の文集合を基本とする4段落構成を取る。次に2段落目［12－32］は、［12－23］［24－32］、あるいは［12－19］［20－32］という2種類に細分化され5段落構成となり、「5A1型」、「5A2型」の2種類に分かれる。さらに「5A2型は」4段落目の［20－32］の文集合が［20－28］［29－32］の2つの段落に分かれて6段落構成となる。

以上のように解すると、57種類もの型をとりあえず6種類に分類整理することが出来る。以下、各型の文集合を示す。

(1)　4A型（4名）

4A	［1－3］	［4－11］	［12－32］			［33－41］
5A1	［1－3］	［4－11］	［12－23］	［24－32］		［33－41］
5A2	［1－3］	［4－11］	［12－19］	［20－32］		［33－41］
6A2	［1－3］	［4－11］	［12－19］	［20－28］	［29－32］	［33－41］

(2)　4B型 (16名)

4B	[1－4]	[5－11]	[12－32]			[33－41]	
5B1	[1－4]	[5－11]	[12－23]	[24－32]		[33－41]	
5B2	[1－4]	[5－11]	[12－22]	[23－32]		[33－41]	
6B2	[1－4]	[5－11]	[12－22]	[23－32]		[33－37]	[38－41]
5B3	[1－4]	[5－11]	[12－19]	[20－32]		[33－41]	
6B3a	[1－4]	[5－11]	[12－19]	[20－26]	[27－32]	[33－41]	
7B3a	[1－4]	[5－11]	[12－19]	[20－26]	[27－32]	[33－36]	[37－41]
6B3b	[1－4]	[5－11]	[12－19]	[20－23]	[24－32]	[33－41]	
5B4	[1－4]	[5－11]	[12－18]	[19－32]		[33－41]	

(3)　4C型 (23名)

4C	[1－4]	[5－12]	[13－32]			[33－41]	
5C1	[1－4]	[5－12]	[13－22]	[23－32]		[33－41]	
6C1a	[1－4]	[5－12]	[13－22]	[23－28]	[29－32]	[33－41]	
7C1a	[1－4]	[5－12]	[13－22]	[23－28]	[29－32]	[33－36]	[37－41]
6C1b	[1－4]	[5－12]	[13－22]	[23－32]		[33－36]	[37－41]
7C1b	[1－4]	[5－12]	[13－22]	[23－26]	[27－32]	[33－36]	[37－41]
5C2	[1－4]	[5－12]	[13－19]	[20－32]		[33－41]	
6C2a	[1－4]	[5－12]	[13－19]	[20－23]	[24－32]	[33－41]	
7C2a1	[1－4]	[5－12]	[13－19]	[20－23]	[24－32]	[33－36]	[37－41]
7C2a2	[1－4]	[5－12]	[13－19]	[20－23]	[24－28]	[29－32]	[33－41]
6C2b	[1－4]	[5－12]	[13－19]	[20－22]	[23－32]	[33－41]	
6C2c	[1－4]	[5－12]	[13－19]	[20－26]	[27－32]	[33－41]	
7C2c	[1－4]	[5－12]	[13－19]	[20－26]	[27－32]	[33－36]	[37－41]
5C3	[1－4]	[5－12]	[13－23]	[24－32]		[33－41]	

(4)　4D型 (18名)

4D	[1－4]	[5－14]	[15－32]			[33－41]	
5D1	[1－4]	[5－14]	[15－19]	[20－32]		[33－41]	
6D1a	[1－4]	[5－14]	[15－19]	[20－23]	[24－32]	[33－41]	
7D1a1	[1－4]	[5－14]	[15－19]	[20－23]	[24－32]	[33－36]	[37－41]
7D1a2	[1－4]	[5－7]	[8－14]	[15－19]	[20－23]	[24－32]	[33－41]

6D1b	[1－4]	[5－14]	[15－19]	[20－26]	[27－32]	[33－41]	
5D2	[1－4]	[5－14]	[15－23]	[24－32]		[33－41]	
6D2	[1－4]	[5－14]	[15－23]	[24－32]		[33－36]	[37－41]
5D3	[1－4]	[5－14]	[15－26]	[27－32]		[33－41]	
5D4	[1－4]	[5－14]	[15－28]	[29－32]		[33－41]	

(5)　4E型（4名）

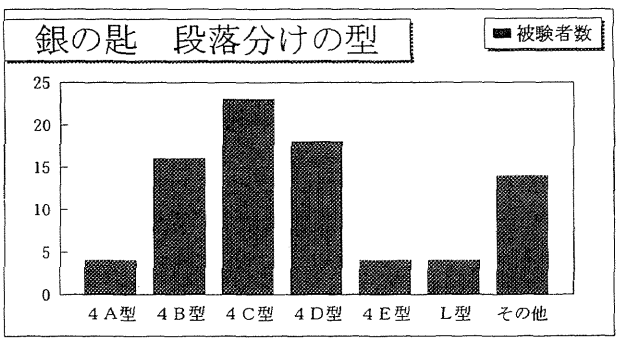
4E	[1－4]	[5－19]	[20－32]			[33－41]	
5E	[1－4]	[5－9]	[10－19]	[20－32]		[33－41]	
7E	[1－4]	[5－9]	[10－19]	[20－22]	[23－32]	[33－36]	[37－41]

(6)　L型（4名）

6L	[1－4]	[5－10]	[11－19]	[20－26]	[27－32]	[33－41]	
7L1	[1－4]	[5－10]	[11－14]	[15－19]	[20－22]	[23－32]	[33－41]
7L2	[1－4]	[5－10]	[11－14]	[15－23]	[24－32]	[33－36]	[37－41]

ここから明らかになったのは、第一に、冒頭部の段落を［1－3］と捉えるか［1－4］と捉えるかで大きく分かれ、後者の方が圧倒的に多いという点、第二に、3段落目の冒頭文が、12文、13文、15文に分かれ、三者が数値上伯仲している点、第三に、結尾部の段落を［33－41］と認定する被験者が圧倒的多数を占める点、以上の3点である。なおL型は、4段落構成がなく、6、7段落構成をとる型しか見あたらなかった。［図表2］参照。

型	4A型	4B型	4C型	4D型	4E型	L型	その他	合計
被験者	4	16	23	18	4	4	14	83



［図表2］

４Ｃ型を頂点に４Ｂ型、４Ｄ型が続き、後は４Ａ型、４Ｅ型、Ｌ型が少数の被験者でそれに続くという結果である。

このように類型化して段落分けを観察すると、確かに主観的判断の揺れを含みつつ、被験者が１段落として認定する比率の高い段落が存在することもまた確認できる。例えば、[1－4]、[33－41]の文集合は段落としての認定率が高い。しかもまた4Ｂ型から4Ｄ型の中を細かく観察すると、特に3段落目が細分化されて5段落、6段落、7段落へと派生する傾向があり、しかも細分化の区切りにも共通的な型があり、19文、22文、23文が節目になる傾向が認められる。

２－３　段落の冒頭文

そこで次に、被験者全員を対象として、段落構成数の枠を取り外し、段落の冒頭に立つ傾向のある文を整理すると、次のような結果となる。〔図表３〕参照（24ページ）。

５文と33文は、先述の４Ｂ型からＬ型でも観察されたが、被験者全体でも段落の冒頭文として高支持を得ている。特に33文は被験者101名中94名（93%）、５文は86名（85%）が段落の冒頭文と認定している。従って５文、33文の２文には、段落の区切りを示す何らかの指標が存在することを予想させる。
その他、数値は多少低くなるが、20文を筆頭に12文、13文、15文、23文、24文の各文も、段落の冒頭文に位置づけられる可能性は高い。

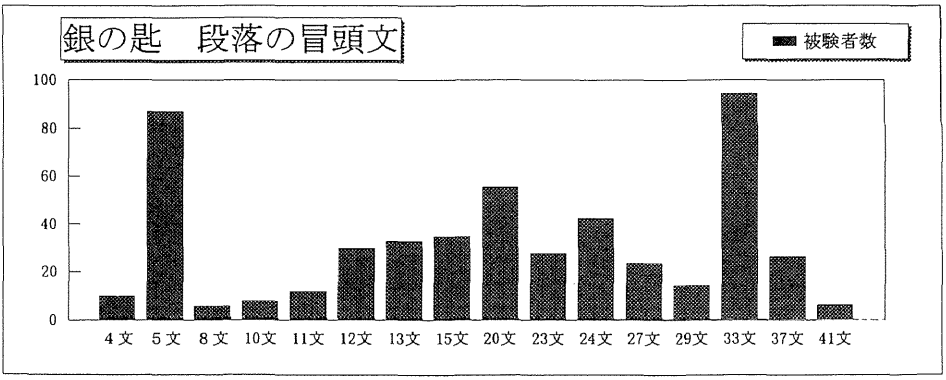
２－４　文集合

同じく被験者全体を対象に、１段落として認定された文集合を整理すると、〔図表４〕（24ページ）のようになる。支持者10名以上の文集合を対象とする。

Ａ＝［１－４］Ｂ＝［５－11］Ｃ＝［５－12］Ｄ＝［５－14］Ｅ＝［12－19］
Ｆ＝［13－19］Ｇ＝［15－19］Ｈ＝［15－23］Ｉ＝［20－22］Ｊ＝［20－23］
Ｋ＝［20－26］Ｌ＝［20－32］Ｍ＝［23－32］Ｎ＝［24－32］Ｏ＝［27－32］
Ｐ＝［29－32］Ｑ＝［33－36］Ｒ＝［33－41］Ｓ＝［37－41］

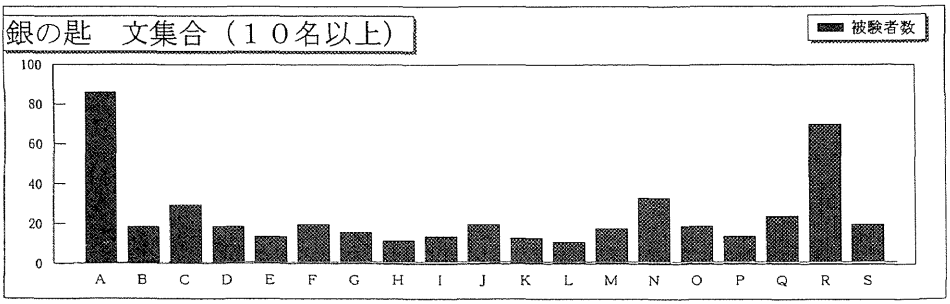
全体に20名前後の数値を示し、ほぼ横並びの状態であるが、群を抜いているのが、Ａ＝［１－４］（86名）とＲ＝［33－41］（69名）である。この２種の文集合は、類型化の４Ｂ型からＬ型でも１段落との認定が高く、段落の冒頭文で

冒頭文	4文	5文	8文	10文	11文	12文	13文	15文	20文	23文	24文	27文	29文	33文	37文	41文
被験者	9	86	5	7	11	29	32	34	55	27	42	23	14	94	26	6



[図表3]

文集合	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S
被験者	86	18	29	18	13	19	15	11	13	19	12	10	17	32	18	13	23	69	19



[図表4]

も５文、33文が高い支持率を示していた点とも関連して、筆者と同様、被験者側もこの２種の文を１段落と認定する傾向のあることが確認される。

以上のような調査結果の分析から、段落の認定は、読み手側の主観的判断による揺れを含みつつ、細部の相違を捨象して大きな枠組みでとらえ直すと、類型化が可能となり、それにより１段落として認定される可能性の高い文集合の存在、段落の冒頭に置かれる可能性の高い文の存在も明らかとなった。この結果を参考に、筆者が設定した段落について、語句の反復表現から分析を試み、語句の反復表現が文段を認定する客観的手がかりとなるか、検討してみたい。

3　語句の反復表現からの観察

反復表現には、同一語句、類義関係語句、対義関係語句、関連語句による反復と、略題による反復がある。反復表現を観察すると、文章の冒頭部から結尾部に至る各段落に渡りほぼ万遍なく出現する傾向のある語句と、文章構造全体から見ると、ある特定部分にのみ高頻度で出現する語句がある。前者は文章の主題に関わるような主要語句、後者は特定部位に関わる部分的話題を支える語句と解される。

そこで「解説」に出現する語句を、次の14系列に整理し、全体に関わる語句と部分的に出現する語句とに注意しながら、出現傾向を観察する。

Ａ＝［作者の経歴］Ｂ＝［中勘助］Ｃ＝［執筆態度］Ｄ＝［文芸ジャンル］Ｅ＝［作品］Ｆ＝［作品世界１］Ｇ＝［作品世界２］Ｈ＝［評価］Ｉ＝［読者層］Ｊ＝［夏目漱石］Ｋ＝［漱石の行為］Ｌ＝［文壇］Ｍ＝［発表機関］Ｎ＝［筆者の見解］

なお［反復図］には、紙面の関係から原文中の語句を一部省略、要約した場合がある。また、＊印を付したのは、対義語であることを示す。例えば、１文「＊執筆する」は「執筆しない」、８文「＊影響うける」は「影響を受けなかった」を表す。［反復図］26頁～29頁参照。

［反復図］では、文章全体に渡り万遍なく出現する語句とある特定部分に集中的に出現する反復表現の分布が確認できる。ほぼ文章全体に渡って観察される反復表現は、Ｃ［執筆態度］Ｅ［作品］Ｆ［作品世界１］の３系列、部分的な反復表現で特徴的なのは、Ａ［作者の経歴］Ｂ［中勘助］Ｄ［文芸ジャンル］Ｈ［評価］Ｉ［読者層］Ｊ［夏目漱石］Ｋ［漱石の行為］の７系列である。残りのＧ［作品世界２］Ｌ［文壇］Ｍ［発表機関］Ｎ［筆者の見解］の４系列は、

〔反復図〕

文	経　歴	中勘助	執筆態度	ジャンル	作　品	作品世界1	作品世界2
1		中勘助氏 作者	＊執筆する		銀の匙		
2		氏			作品		
3		この作家					
4					銀の匙		
5	青年のころ	中氏	愛読する 顧みない	詩歌 散文			
6	大学 国文卒業	（中氏）					
7	それ						
8		中氏	＊影響うける				
9		氏	念願する 表現する 創作欲 ＊刺激する ＊煽る	詩の形式		独特の世界	
10		氏	守る 表現しうる 苦心する	詩の形		自身の世界 それ	
11		（氏）	断念する 屈辱感 筆を執る	長詩 散文			
12				その最初	作品 銀の匙前篇		
13	明治44夏		書かれる		それ		
14	その時 27歳	作者					
15					この作品		
16					この作品	子供の世界	
17	翌年				この作品		
18	当時				この作品		
19							

評　価	読者層	夏目漱石	漱石の行為	文　壇	発表機関	筆者の見解
希有な作家	広くない				雑誌・新聞	
価値	知る人					
すぐれる	それらの人々					
独創的	理解される					
この定評	読者諸氏					紹介する
		夏目漱石	作家始動	自然主義		
		これら		これら		
		それら		それら		
価値		夏目漱石	最初認める			
描写未曾有		漱石	指摘する			
描写きれい			賞賛する			
細かい						
文章彫琢						
真実傷つけない						
文章の響き						
		漱石	推薦		朝日掲載	
	多くない	漱石	高い評価			
作品鑑識眼		漱石	透徹する			今思う

文	経歴	中勘助	執筆態度	ジャンル	作品	作品世界1	作品世界2
20	大正2夏		書かれる		銀の匙後篇		
21					これ		
					前篇		
22					これ		
23					この作品		
					この作品		
24					この作品		
25		作者	描く			子供の世界	
26							
27		この作者			後の作品		
28					犬 …		
29		作者				おのれの世界	
30							
31					その作品		
32					25年前の作		
					銀の匙		
33			描かれる		銀の匙	子供の世界	
34						それ	
						子供の世界	大人の見た
						子供時代	大人の回想
35						それ	
						子供の体験	
						子供の世界	
36			描きうる			子供の体験	
						子供の体験	
37						子供時代	大人
						子供	記憶する
						子供の立場	忘れ去る
38						子供	大人
						子供の心	しかる
							彼
							無理解
39			陰影描写			子供の心	そういう大人
							驚嘆に価する
40			ああいうこと				大人の心理
41			描かれる			子供の世界	
			表現する			人生の神秘	

評　価	読　者	夏目漱石	漱石の行為	文　壇	発表機関	筆者の見解
		漱石	高い評価		同紙掲載	
独創性 ＊先人の影響 ＊人の眼借りる ＊流行の思想 希有な性格 ＊眼を向ける 風馬牛 ＊古臭くなる 新鮮味		漱石	高く評価 強く感じる		文壇の動き 文壇の動き 今の文壇	
		漱石の語	見たことない			借りて言う 困難である

ある特定部位の僅少の反復表現であるか、適宜、原文中に散見する反復表現であるかであり、それらは特定部位の話題を支えるに足る、つまり「思想の一団を結束したる」ような機能は認められない。

まず全体的に観察される反復表現であるが、C［執筆態度］は、作者の文芸作品に対する姿勢から原文の作品世界で意図した表現態度まで含めて、主として動詞で表現されているものを一括した。この系列は、作者の創作態度の遍歴と原文の描く作品世界に関わる系列であり、1文から41文に至るまで、途中の断続はあるものの、連続性が確認される。但しこの系列は、特に5文～13文にかけて緊密な部分的反復表現が観察される。またE［作品］は、中勘助に関わる作品、『銀の匙』を始めその後の作品も含めて一括した系列、F［作品世界1］は、中勘助が描こうとする文芸世界を、『銀の匙』の作品世界も含めてまとめた系列である。これらも、途中の断続はあるものの、ほぼ全体に渡っているが、しかし詳細に観察すれば、ある特定部位に集中的に出現する傾向もあり、部分的反復表現も観察される。

以上のように、全体的反復表現の3系列から、和辻哲郎の「解説」は［執筆態度］［作品］［作品世界］を主題とする文章構造をとっていることが確認される。

次に、部分的反復表現（全体的反復表現中に観察される部分的な緊密度の高い反復も含む）に注目し、その初出から終結へ至る反復表現の展開の様相を観察し、それと和辻哲郎の段落構成との関係を検討したい。

まず各系列毎に、文章の冒頭部から結尾部に至る展開の中で、部分的反復表現が観察される箇所をチェックすると、同一文に初出語をもち、ほぼ近い位置の文に終結語をもつ反復表現のグループが幾つかあることが確認された。それを便宜的に次の6グループに分類した。

第1グループ

B［中勘助］系列	1文～3文	H［評価］系列	1文～4文
E［作品］系列	1文～4文	I［読者］系列	1文～4文

第2グループ

A［経歴］系列	5文～14文	C［執筆態度］系列	5文～13文
B［中勘助］系列	5文～14文	D［ジャンル］系列	5文～12文

第３グループ

Ｅ［作品］系列　15文～18文　　Ｊ［夏目漱石］系列　15文～23文
Ｈ［評価］系列　15文～19文　　Ｋ［漱石行為］系列　15文～23文

第４グループ

Ｅ［作品］系列　20文～22文

第５グループ

Ｅ［作品］系列　23文～33文　　Ｈ［評価］系列　23文～32文

第６グループ

Ｃ［執筆態度］系列　33文～41文　　Ｇ［作品世界２］34文～40文
Ｆ［作品世界１］系列　33文～41文

以下、具体的に反復表現の様相を検討していく。

３－１　第１グループ

Ｂ［中勘助］系列　１文～３文　　Ｈ［評価］系列　１文～４文
Ｅ［作品］系列　１文～４文　　Ｉ［読者］系列　１文～４文

文	Ｂ	Ｅ	Ｈ	Ｉ
１文：	中勘助氏 作者	銀の匙	希有な作家	広くは知られていない
２文：	氏	作品	すぐれた価値	氏の作品…知っている人
３文：	この作家		非常にすぐれる 独創的な芸術家	それらの人々 理解せられている
４文：		銀の匙	この定評	初めて…読者諸氏

第１グループに属する［１－４］は、類型４Ｂ型～４Ｅ型でも確認され、「文集合」の支持者が最高の86名にも達する点から明らかなように、筆者と同様、被験者の大半も一段落と認定する傾向のある文集合である。この部分のまとまりを系列毎に確認すると次のようになる。

Ｂ系列は、「中勘助氏」を初出に、「作者→氏→この作家」へと、語句は変化

するが、同一人物を指示するという観点で、情報の流れが確認される。E系列は「銀の匙」を初出に、中勘助の「作品」一般へと話題が移り、4文で再び「銀の匙」に至る流れを取る。この中勘助の作品を含めて「銀の匙」は12文に至るまで出現しないため、1文～4文までに一つの内容的まとまりが確認できる。

H系列は、「希有な作家」とまず切り出し、次いで「氏の作品のすぐれた価値→この作家が非常にすぐれたまたきわめて独創的な芸術家」へと、作家、作品の評価を立て続けに列挙する。そして4文で「この定評」と、コ系の指示語で捉え直しを図り、それまでの叙述内容を括りまとめると同時に、コ系により筆者の目下の関心が「この定評」の紹介にあることを明示する展開となっている。I系列は、「あまり広くは知られていないかも知れない」と、広い範囲の読者層を持たない点から始め、しかし、「氏の作品のすぐれた価値を知っている人も少数ではない→それらの人々の間」へと進め、4文で「初めて『銀の匙』に接する読者諸氏」に至る展開で、いずれも中勘助の読者層に関わる叙述が反復されていると解せる。4文以降、読者層を想定する叙述は、18文「当時この作品を…人は多くはなかったであろう」と、僅か1例認められるだけでしかなく、実質的には4文までの叙述で終了した感がある。

このように4系列の初出語が同一語句、関連語句等の反復を綿密に繰り返し、特にH系列で「この定評」とコ系の指示詞でそれまでの叙述を捉え直すことで、反復に一応の区切りを付ける形を取り、部分的反復を終了させていると解せる。

3－2　第2グループ

A［経歴］系列　5文～14文　　C［執筆態度］系列　5文～13文
B［中勘助］系列　5文～14文　　D［ジャンル］系列　5文～12文

	A	B	C	D
5文：	青年のころ	中氏	愛読する 顧みない	詩歌 散文
6文：	大学／英文 国文学科卒業	(中氏)		
7文：	それ			
8文：		中氏	影響受けない	
9文：		氏	念願とする 表現する	詩の形式

		創作欲	
		＊刺激する	
		＊煽る	
10文：	氏	守る	詩の形
		表現しうる	
		苦心する	
11文：	（氏）	断念する	長詩
		屈辱を感じる	
		筆を執る	散文
12文：			その最初のまとまった作品『銀の匙』前篇
13文：明治44年夏		書かれる	それ
14文：その時／27歳	作者		

第２グループは、類型化でも明らかになったように、４Ｂ型［５－11］４Ｃ型［５－12］４Ｄ型［５－14］４Ｅ型［５－19］と、いずれも冒頭の５文を共通にしながら、結尾が11文、12文、14文、19文と、４種類に分かれる結果となったところである。「文集合」の分析でも、［５－12］の文集合が多少抜きん出てはいるが、ほぼ４者とも10台～20台で伯仲し、分散化の傾向を示してもいた。この被験者の段落認定が反復表現にどのように関わるか、検討していくことにする。

Ａ系列は、５文「青年のころ」を初出に、「大学」「英文学科に席を置いた」「国文学科に転じて」「卒業した」までと、13文の『銀の匙』前篇を書いた「明治44年夏」「その時27歳」までに、各々出現するだけで、その間に詳細な記述の反復はないが、作者が『銀の匙』を書くまでの略歴紹介として、節目に当たる叙述の反復表現と見なせるものである。

この略歴に連動して、Ｂ系列では、５文に「中氏」を初出に、「（中氏）→中氏→氏→氏→（氏）→作者」という順序で、略題を含め同語反復が繰り返される。『銀の匙』の出現と共に「中氏」は「作者」に変わり、それ以降の叙述では「中氏」は一切文章中から姿を消す。先述したようにＢ系列は１文～３文までに部分反復をなしているが、５文では「中勘助」が「中氏」に切り替わり、それを中心とする反復表現が観察されるところで、略題も含めて「中氏」の反復表現は11文を以て終了する。この点が［５－11］を一段落と捉える根拠にな

るのかと推測する。

Ｃ系列は、作者の文芸への嗜好を含めて、創作態度、執筆姿勢に関わる関連語句をまとめたものであるが、ここでは５文「(詩歌を）愛読し」「(散文を）顧みない」を初出に、11文「(散文に）筆を執る」、13文「(銀の匙の前篇は）書かれた」に至るまで、作者の執筆態度が関連語句の反復表現の形を取って連続的集中的に出現している。

但し、この系列を具に観察すると、５文の「愛読する」から11文の「筆を執る」までは、中氏を提題表現として氏が作品を執筆するまでの心的態度の表現であるのに対し、13文「書かれた」は、作品を提題表現として、それを受ける形での叙述表現であるから、正確には作者の執筆態度の表現とは言えず、11文までと13文とでは同一系列に含めたが質的には異なるものである。そのため11文を段落の結尾に見なす被験者が出てきたのかと推測する。

Ｄ系列は、Ｃ系列に連動して、文芸嗜好、執筆態度に関わる文芸上のジャンルに関わる語句が「詩歌」「散文」を初出に、12文「その（散文に筆を執るようになったトコロノ）最初のまとまった作品」に至るまで、関連語句の反復を繰り返す。しかも12文の「最初の作品」がＥ［作品］系列の「銀の匙前篇」とイコールでつながり、13文「それ」へつながっていくため、このＤ系列は、Ｅ系列の「銀の匙」を復活させる働きもしている。なお５文の「詩歌」から11文の「散文」までは文芸上のジャンルに関わる反復表現となっているが、12文は「その最初のまとまった作品」として、広く解すれば５文から11文までの叙述の流れを受け、狭くは12文の「散文に筆を執るようになった（トコロノ)」を受けているため、反復表現は11文までと12文以降は同レベルの語句の反復とはなり得ていない。従って11文までを一つに括る被験者が出てきたと推測される。或いは12文を段落の結尾と見る被験者の場合は、12文がそれまでの叙述の流れを受けている点に注目したのかとも解せる。

しかし語句の部分的反復に注目すれば、Ａ、Ｂ、Ｃの各系列は、５文にある初出語が14文で取りあえず終結し、15文からＥ、Ｈ、Ｊ、Ｋの各系列における初出語とその部分反復が観察されるのであるから、14文を部分反復の終了と見なすのは妥当ではないかと考える。

３－３・４　第３・第４グループ

Ｅ［作品］系列	15文～18文	Ｊ［夏目漱石］系列	15文～23文
Ｈ［評価］系列	15文～19文	Ｋ［漱石の行為］系列	15文～23文

	E	H	J	K
15文：	この作品	価値	夏目漱石	最初に認める
16文：	この作品	描写として未曾有	漱石	指摘する
		描写がきれい		賞賛する
		細かい		
		文章に非常な彫琢		
		真実を傷つけていない		
		文章の響きがよい		
17文：	この作品		漱石	推薦
18文：	この作品		漱石	高く評価する
19文：		作品鑑識眼	漱石	透徹する
20文：	銀の匙後篇			
21文：	これ／前篇		漱石	いっそう高く評価する
22文：	これ			
23文：	この作品	独創性	漱石	高く評価する
	この作品			強く感じる

第３・第４グループと次の第５グループは、被験者の揺れが最も著しい部分である。特に４段落構成を基準にする３段落目はその内部をどのような部分集合で捉えるか、多様な型が観察されたところでもある。本稿では細部の文集合まで至らず、取りあえず各系列における初出語の出現を重視し、それを基に部分的反復を観察することにする。

Ｅ系列は、参考までに15文～23文までを書き出してみたが、これら形態上同一、あるいは類似形態の語句も、詳細に観察すると、その指示内容は相違する。まず15文「この作品」（＝『銀の匙』前篇）を初出に「16この作品→17この作品→18この作品」と同語反復を繰り返す一連のまとまり、次いで、20文「銀の匙後篇」を初出に、「21これを→22これも」とコ系の指示語で『銀の匙』後篇を反復するまとまり、23文そして前２者を統合して「この作品」（『銀の匙』前・後篇）とする23文以降のまとまりと、「前篇→後篇→前・後篇」という図式となっている。従って15文～23文に至る部分的反復は、［15文～19文］［20文～22文］［23文～］の３つのまとまりとして捉えることが出来る。

Ｈ系列は、15「（この作品の）価値」を初出に、漱石の評語が16文に「子供の世界の描写として未曾有→描写がきれいで細かい→文章に非常な彫琢→不思

議なほど真実を傷付けていない→文章の響きがよいこと」と、関連語句による反復表現で列挙される。それらの評語は、19文で「漱石の作品鑑識眼」と捉え直されて、これら一連の漱石による評価に区切りが付けられる形となっている。

これらに対し、J系列はすでに7文「夏目漱石」を初出とするが、部分反復では15文～23文まで、「15夏目漱石→16漱石→17漱石→18漱石→19漱石（の作品鑑識眼）→21漱石→23漱石」と、ほぼ連続して出現し、この部分の話題が漱石を中心に展開していることを表している。またそれに連動するかのようにK系列も、漱石の『銀の匙』に関わる言動を関連語句で反復させているが、しかしこの系列は、15文「最初に認めた」を初出とする「16指摘して賞賛した→17推薦によって→18高く評価した→21いっそう高く評価した」までの、漱石の業績を説明する部分と、23文「このように高くこの作品を評価したのは」「(独創性を）強く感じた」と、評価の理由説明をする部分と、2つに分かれ、「評価した」という同語反復による連続性が確認されるとしても、23文はそれ以前の文脈とは文中での機能は同一ではない。以上から、K系列の部分反復は、15文から21文までと解される。さらに詳細に検討すれば、21文「いっそう高く評価した」は、それまでの評価とは対立関係に成るため、「15文～19文」「21文」という、別個の話題のまとまりを確認できる。以上から、話題のまとまりを……で示すと、次のようになる。

	E	H	J	K
15文：	この作品	価値	夏目漱石	最初に認める
16文：	この作品	描写として未曾有	漱石	指摘する
		描写がきれい		賞賛する
		細かい		
		文章に非常な彫琢		
		真実を傷つけていない		
		文章の響きがよい		
17文：	この作品		漱石	推薦
18文：	この作品		漱石	高く評価する
19文：		作品鑑識眼	漱石	透徹する
……				
20文：	銀の匙後篇			
21文：	これ／前篇		漱石	いっそう高く評価する

22文：これ
……　……

23文：	この作品	独創性	漱石	高く評価する
	この作品			強く感じる

以上の分析から、第３グループは、Ｅ系列、Ｈ系列を基準に、Ｋ系列を参考にして「15文～19文」まで、第４グループは「20文～22文」までと捉えておく。

３－５　第５グループ

Ｅ［作品］系列　23文～33文　　Ｈ［評価］系列　23文～32文

	Ｅ	Ｈ
23文：	この作品	独創性
	この作品	
24文：	この作品	先人の…認められない
25文：		いかなる人の眼…借りない
26文：		「流行」…動かされない
27文：	後の作品	この希有な性格
28文：	『犬』…	
29文：		どこへも眼を向けない
30文：		風馬牛である
31文：	その作品	古臭くならない
32文：	25年前の作	新鮮味を失わない
	銀の匙	

第５グループの冒頭に位置する23文は、Ｅ系列、Ｈ系列の初出語を有すると同時に、Ｊ・Ｋ系列の15文からの部分反復が終了する箇所でもある。いわば第３グループの話題の中心を占める漱石による評価に一応終止符を打つと同時に、第３グループのＥ系列を新たな指示対象で捉え直し、さらにＨ系列で漱石の評価を筆者和辻哲郎の評価で捉えなおして、叙述を展開する形といえる。

まずＥ系列の「この作品」は、『銀の匙』の前篇と後篇を取りまとめたものであることは先述した。これが「24この作品→27後の作品→28犬、提婆達多…→31その作品→25年前の作たる『銀の匙』」へと、同語反復、関連語句の反復

を繰り返し、最終的に32文「銀の匙」へと至る流れが確認される。しかも32文で「25年前の作たる」と時間の区切りを示す修飾語が付されることで、それまでの一連の作品関連の叙述がここで一旦堰き止められ、改めて筆者が25年前の作をここで取り上げ、「解説」を書いていることを、読者は知らされることになる。いわば32文の時制の切り替えを表す修飾語を伴う反復表現は、それまでの叙述の流れに一応の決着を付ける指標として機能していると解せる。

H［評価］系列は、先行文脈の漱石の評価を「独創性」という新たな視点で捉え直し、「独創性」を表す類義関係の語句を列挙することで、反復を繰り返す。

24先人の影響が全然認められない　→25いかなる人の眼をも借りなかった
→26言いかえれば「流行」の思想や物の見方には全然動かされなかった。

このように、先人の影響を一切受け付けない作者の独自な姿勢を述べ、それらの叙述を、「27この希有な性格」と捉え直し、それが他の作品にも認められる点を指摘する。そして、さらに作者の独自な性格を次のように繰り返す。

→29おのれの世界以外にはどこへも目を向けようとしない
→30文壇の動きなどは風馬牛である

以上に見る作者の姿勢から、作者の作品に向かい、その作品を次のように評価する。

31文壇の動きにつれて古臭くなるなどということもない
32今の文壇に出しても依然として新鮮味を失わないであろう

このように評価は、作品の独自性から作者の独自な性格、そして『銀の匙』の文壇の動向に左右されない価値へと進んでいき、評価に関する叙述は32文を以て終了する。

3－6　第6グループ

C［執筆態度］系列　33文～41文　　G［作品世界2］　34文～40文
F［作品世界1］系列　33文～41文

	C	F	G
33文：	描かれている	子供の世界	
34文：		子供の世界	大人の見た
		子供時代の記憶	大人の体験の内に回想せられる
35文：		子供の体験	
		子供の世界	
36文：	描きうる	子供の体験	
		子供の体験	
37文：		子供の時代	大人は…記憶しているつもり
		子供	忘れ去る
		子供の立場	
38文：		子供	大人が…しかる
		子供の心	彼が…無理解である
39文：	陰影の描写	幼い子供の心	大人…驚嘆に価する
40文：	ああいうこと		大人の複雑な心理
	描く		
41文：	描かれる	子供の世界	
	表現している	深い人生の神秘	

先述のように、33文から41文までは、「段落分けの型」では４Ａ型からＬ型までいずれの型でも一段落として認定する傾向が高く、文集合でも被験者の支持率が２番目に高かった部分集合である。語句の反復表現からも、この部分は特にＦ、Ｇ系列において、緊密なまとまりを形成していることが確認される。

Ｆ、Ｇ系列の反復表現は、基本的に「子供」対「大人」の対立の図式で展開している。しかし最後の41文に至り、その対立の図式は、「大人」が姿を消すことで消滅すると同時に、新たなる対立として、Ｃ系列の「描かれている」対「表現されている」、Ｆ系列の「子供の世界」対「深い人生の神秘」の対立関係となって出現する。そして「子供の世界」を中心に展開してきた「作品世界」が、ここで一気に「深い人生の神秘」を表現する世界へと飛躍して、その「作品世界」に関わる反復表現が完了する形となっている。

この「作品世界」は、第２グループの「９詩の形式によって氏独特の世界（を表現すること）→10自分自身の世界（をのみ守り）」、第３グループの「16子供

の世界（の描写）」、第５グループの「25子供の世界（を描いた）→29おのれの世界（以外には）」に至るまで適宜出現し、33文以降は集中的に出現して、中勘助の念願する「氏独特の世界」が如何なるものかを表現してきた。が結局、最後の41文で「子供の世界」に名を借りて述べられてきた作品世界が、単なる子供の世界の描写ではなくして、実は「深い人生の神秘」の表現であったという、その作品世界の神髄が解明される仕組みとなっている。

以上検討してきた６種のグループを、筆者の設定する段落区分に重ねると、次のような対応関係が確認される。

筆者の設定する段落		語句の部分的反復	
Ⅰ段落	１文～４文	第１グループ	１文～４文
Ⅱ段落	５文～14文	第２グループ	５文～14文
Ⅲ段落	５文～19文	第３グループ	15文～19文
Ⅳ段落	20文～22文	第４グループ	20文～22文
Ⅴ段落	23文～32文	第５グループ	23文～32文
Ⅵ段落	33文～41文	第６グループ	33文～41文

４　まとめ

語彙的手段による反復の様相を観察してみた。未だ分析の十分でない点はあるが、和辻哲郎著「解説」の文章では、新出語の出現による部分反復が筆者の設定する段落と対応していることが確認できたかと思う。「解説」では、まず文章の冒頭部に幾つかの系列が立てられ、各系列の冒頭に新出語句が用意される。そしてその系列内で集中的に連関語句の反復が繰り返され、部分反復が終結すると同時に話題の纏まりとして１段落が設定される。次に話題の展開を図って、新たに系列が立てられ新出語が出現しそれに関連する語句の部分反復が繰り返される。ただし展開部でもすべてが新たな系列の新出語句のみで成り立つのではなく、当然情報の受け継ぎとして既出の語句の反復表現も観察される。それら既出の語句は、次の段落の冒頭のみで姿を消す場合と、さらに反復を繰り返して幾つかの段落に渡る場合もある。段落の全体に渡る反復表現は文章の主題を示す働きがあるといえる。

文段を認定する手がかりとしては、新出語の出現と反復、そして終結という

部分反復に注目する必要があるかと思う。［反復図］には筆者の設定する形式段落を罫線で示してあるが、特定の系列に観察される部分反復は形式段落と明確に対応する形となっている。

今回取り上げた「解説」のような、筆者の見解が筋道を立てて明瞭に述べられている論理構成の確かな文章の場合、部分的な反復表現の観察される箇所は、五十嵐力の言う「思想の一団を結束したるもの」に相当すると見なすことができようし、形式段落が即ち内容的纏まりを示す文段を表していると解することができるかと思う。従って、部分的反復表現は、文段認定の一つの目安になるのではないかと考える。

注１　西田直敏 1992『文章・文体・表現の研究』20頁　和泉書院
注２　五十嵐力 1909『新文章講話』466～467頁　早稲田大学出版部
注３　時枝誠記 1960『文章研究序説』72～77頁　山田書院
注４　佐久間まゆみ 1986「文章構造論の構想－連文から文段へ－」49頁
　　永野賢編『文章論と国語教育』朝倉書店
注５　金岡孝 1989『文章についての国語学的研究』193頁
注６　森田良行 1993『言語活動と文章論』101～102頁　明治書院
注７　塩澤和子 1994「社説の文章構造－語句の反復表現を手がかりとして－」
　　『文藝・言語研究　言語篇』25　筑波大学　文芸・言語学系

［参考文献］

１．五十嵐力 1909『新文章講話』早稲田大学出版部
２．池上嘉彦 1983「テクストとテクストの構造」
　『談話の研究と教育』（日本語教育指導参考書11）国立国語研究所
３．市川孝 1978『国語教育のための　文章論概説』教育出版
４．金岡孝 1989『文章についての国語学的研究』明治書院
５．佐久間まゆみ 1986「文章構造論の構想－連文から文段へ－」
　永野賢編『文章論と国語教育』朝倉書店
６．佐久間まゆみ 1987「『文段』認定の一基準Ⅰ－提題表現の統括－」
　『文藝・言語研究』11　筑波大学文芸・言語学系
７．正保勇 1981「『コ・ソ・アの体系』」
　『日本語の指示詞』（日本語教育指導参考書８）国立国語研究所
８．高崎みどり 1986「文章の語句的構造」『国文』64号
　お茶の水女子大学国語国文学会
９．寺村秀夫他編 1990『ケーススタディ　日本語の文章・談話』おうふう
10．時枝誠記 1960『文章研究序説』山田書院
11．永野賢 1986『文章論総説』朝倉書店
12．西田直敏 1992「段落とその接続について」

『文章・文体・表現の研究』和泉書院
13．馬場俊臣 1986「『主要語句の連鎖』と『反復語句』との交渉」
永野賢編『文章論と国語教育』朝倉書店
14．林四郎 1987「文の承接に伴う語の意味の展開」
『漢字・語彙・文章の研究へ』明治書院
15．R.de ボウグランド／W.ドレスラー1984『テクスト言語学入門』紀伊国屋
16．森田良行 1993『言語活動と文章論』明治書院